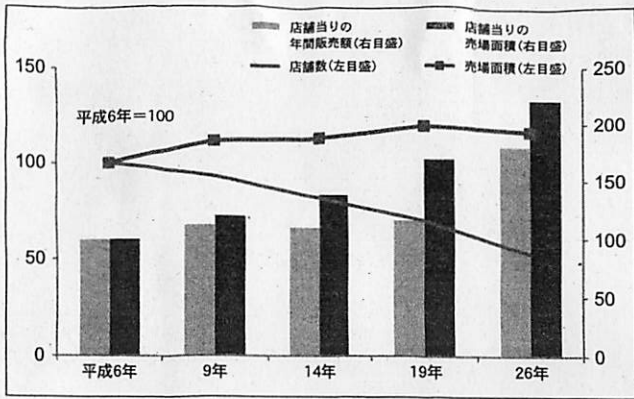
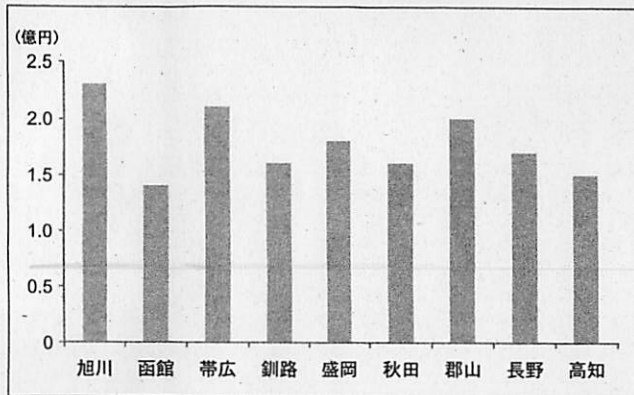


【グラフ2】旭川の小さ店の大規模化



【グラフ3】1店舗当りの年間販売額



日銀事務所長の
あさひかわ経済
ディスカバリー
36

旭川の小さ店

北海道新聞社「写真が語る旭川」を見ると、平和通りや銀座通り商店街が賑やかだった頃の写真が掲載されています。また、三浦綾子の小説を読むと、平和通りに商店が並び、人通りで賑わっていた様子が描かれています。

往時を知る地元の方からは、市内中心部の商店街は随分寂しくなってしまったという話を聞きます。人口が減少しているうえ、購買力が札幌や通販に流出してしま

まい、地元の小売業は衰退する一方だと悲観する声も聞かれます。

一方、今日の旭川でも、駅前のイオンや郊外のショッピングセンターに行くくと、多くの買い物客で賑わっています。ロードサイドには大型店が立ち並び、広大な駐車場を併設することにより、車での来店客を集めています。

こうした現象は、旭川に限らず地方都市では共通に見られるものだと思いますが、経済統計面ではどのように表れているのでしょうか。

経済産業省の「商業統計」によると、平成二十六年の旭川市内の小売店の数は二千三十四軒

で、二十年前の平成六年には三千八百九十軒でしたので、この間に四八%減少しています。これに対し、市内小売店全体の年間販売額は、平成六年の四千九百二十八億円に対し、同二十六年は四千六百二十三億円です。六%の減少にとどまっています。

一方、同じ期間に旭川市の人口は三%、このうち購買力が高い十五~六十四歳の人口は一八%減少しています。こうした中で、販売額の六%の減少に関しては、様々な見方が可能だと思います。確かに、小売販売額が減少していることは、地域で回る経済の規模が縮小しているこ

場面積は、平成二十六年までの二十一年間に一六%増加しています。これに伴い、一店舗当りの売場面積は二・二倍になり、一店舗当りの年間販売額も八割増加しています。実際、旭川の小さ店の大規模

化は、道内他都市や国内の同規模都市と比べても、かなり進んだ状況にあります。2、3参照。

現在、旭川の小さ業界の景況感は、各種調査結果をみてもあまり芳しいものではありません。

せん。売上が伸びず、値下げをしたりセールを打ったりしないと顧客がどんどん離れていくと嘆く先が多いようです。もっとも、これは人口減少や高齢化による市民の購買力低下よりも、小売業者間の

競争が激化していることによる面が大きいと思います。実際、この一年だけみても、市内で多くの大型店がオープンしています。札幌や通販との競争も激しくなっていると思います。消費者にとっては、小売店の競争により、いい品物を安価で購入できるのは好ましいことですが、小売業者の立場は、熾烈な競争の中で経営を維持していくのは本当に大変なことだと思えます。それでも、様々な小売業者が旭川で新たな店を出すという事は、旭川

が札幌に次ぐ道内第二の消費地として、経営努力次第で商機を見出せる市場であると認識されているからだと思います。

ただ、残念なことに、旭川市内の大型店の多くは、域外の企業です。もちろん、域外の企業であっても、地元で雇用と所得が生まれますので、決して悪い訳ではありません。しかし、ここはぜひ地元企業にも頑張ってもらいたい、地元経済界に活力を与えてもらいたいと思えます。

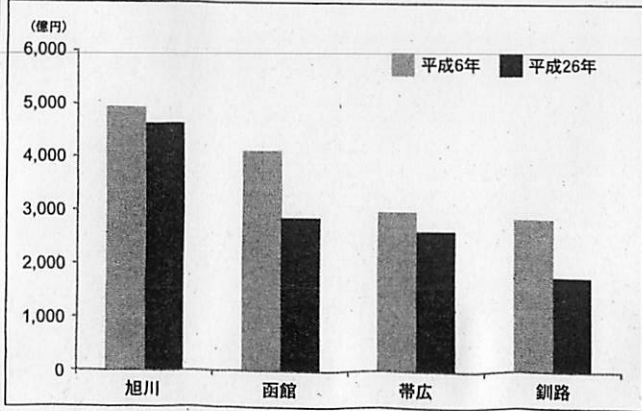
とを意味しますので、寂しい話ではありますが、私はむしろ意外に健闘しているという印象を持ちました。実際、同じ二十一年間に釧路市では三八%、函館市は三二%、帯広市でも一二%減少しています。旭川は道

内他都市に比べても傷は浅いと言えます。ラフ1参照。

こうした状況のもとで、旭川では小売店舗の大規模化が着実に進展しています。

店舗数が大きく減少する中で、小売店の売

【グラフ1】年間販売額



【河村賢士かわむらけんじ】一九六六年(昭和三十七年)東京都生まれ。一橋大学経済学部卒。支店は函館、福岡に勤務。二〇一五年(平成二十七年)六月、国際貿易局国際業務課長から旭川事務所長に就任。趣味は登山スキ。

（毎月第四週に掲載します）